

大江戸慕情



九

お藤は、辰之助から離れ、豎大工町の頭として、出発の準備をしていた。

七百余名の隊列が整った。

「行くぞ！」

「おう！」

吉五郎が先頭に立って、唄い始めた。

♪えーえーえー。えーいーえー。ぎんーのー。かんざーしー。♪

後ろに続いた職人たちが声を合わせて、

♪えーえー。はーれーわーな。やーっさい。やっさーやっせー。♪

♪えーえーえー。えーいーえー。……………♪

纏持、梯子持ち、そして平人の鳶たち職人。高く上げた提灯そして、林立した長鳶口が動き出した。

細川越中守の上屋敷にはすでに大名火消たちがあふれていたが、火の勢いは衰えを知らず近くの富田帯刀、東條平左衛門、市橋壹岐守の屋敷にも飛び火していた。

「火は寅の方角から来ているぞ。」

「吉助、みんな、市橋壹岐守の屋敷に行くぞ。」

吉五郎が大声で云った。

「へえ」

「大工町の組頭、市橋壹岐守の屋敷へ行って、逃げる準備をするように伝えろ」

「頭取、承知。みんな、行くよ」

お藤たちは走った。

火は吉五郎やお藤たちを、迫ってきた。

「吉助、あそこを火消口にしろ」

「梯子を架けろ！」

「おう」

「ちょっと待った。ここは俺たち消し口だ」

ろ組の連中は、今自分たちが架けた梯子を上り始めた。吉助は纏を持って、すでに消し口に立ち、火の粉を叩き落とすように、纏を振っていた。

お藤たちも次々上った。

ろ組の纏持が吉助に言って来た。

「よ組の、ここはおいらの火消口だ。どきやがれ」

「何言ってやがる、こっちの火消口だ。とっとと下がれ」

吉助はろ組の纏持と言いあった。そこに、よ組とろ組の連中が続々と集まってきた。。

「どかねえんだな。こちとらはろ組だ」

と、後から来たろ組の一人が長鳶口を構えた。それに対し、吉助の弟子の朝太が鳶口を構えた。

「朝太、だめよ。今度喧嘩したら、本当に牢屋行よ」

お藤が怒鳴った。

ろ組も組頭が制した。

「一緒にやろう！」

お藤がろ組の頭に言った。

「ありがとよ。お藤さん」

よ組とろ組の纏が振られたとき、

「町の連中、ここは大名火消の出番だぞ。さっさとどけ」

丹波篠山藩青山家の火消たちが雪崩を打ったように押し寄せ、よ組とろ組の纏持をどけ消し口を奪った。

「この野郎ッ、貧乏ざむらい奴！横からきやがって、ふざけるねえ」

ろ組の纏持が勢いに任せて、再び消し口に来た。

「狼藉者、下がれ」

「何言ってんだ、このずる侍」

「無礼者、叩き斬ってやる」

「抜いてみな、斬るんなら斬ってみろやい」

「よい、斬ってやる」

‘バシッ’

ろ組の纏が切られた。

「畜生、やりやがったな。町火消を馬鹿にするな。」

纏持ちが近くいた職人の長鳶口を奪い取って、侍に飛びかかろうとするのを、お藤とろ組の頭たちは体を制して止めた。

「貴様、何やってんだ」

火消装束を着た青山家の侍が梯子を下りて、纏を斬った火消人のそばに行き、屋根から突き落とした。

「この火消口は、よ組とろ組のものだ。青山家の者はすぐ降りろ！」

お藤はその声で、やっと思い出した。(三河へ行く途中、あたいたちを助けてくれたお侍さんだ。)

その侍が、お藤たちに頭を下げて梯子を下りて行った。

炎が風に押されて、お藤たちの方に向かって来た。

「吉助、早く降りろ」

「皆、早く降りろ」

吉助は皆が下りるまで、纏を振り続けた。

「吉助、もういいから早く降りろ」

「よ組、みんな風下に下がるぞ」

「おう！」

火消御殿屋敷から出張ってきていた定火消の連中は、須田町まで下がっていた。吉五郎は組頭たちに須田町よりさらに風下の空き地へ下がった。

ろ組の連中と青山家の火消たちそして定火消たちは須田町の長屋を片っ端から壊していた。

「頭取、これは酷くなりそうですね。」

吉助は真っ黒な顔で言った。

「なんとか、鍛冶町まででくい止めなければ。」

吉五郎のそばにいた白壁町の組頭の半次郎が言った。

「ここまで火が来たら、よ組の連中の長屋が全部燃えてしまうわ。」

お藤は泣きそうな声で言った。

一方、辰之助は、町奉行所の役人たちが来るのを空き地で待っていた。お藤たちがいなくなってから、四半刻ほどたってから大岡忠助が先頭になって、与力六人、同心三十人が空き地に陣取った。

辰之助はお付きの役人を通して、忠相に目通りを願った。

「その方が、大奥の伊賀者か？」

「はい、青葉辰之助と申します。ぜひ、お役にたちとう御座います。大奥からの命でもございするに」

「分かった」

忠相はすぐに与力の高津五郎衛門を呼んで、簡単に辰之助の話をして、言った。

「高津、この青葉辰之助を手下に抱えてくれ」

「はっ、承知いたしました」

「高津様、よろしゅうお願いいたします」

高津は辰之助を手下の同心三人に会わせ、その中の佐々木和之進の手下になるよう命じた。

「では我々も、火付強盗をひっ捕らえに出かけるぞ」

「おう。」

高津たちは、神田鍛冶町方面に向かって歩き出した。

また、火付盗賊改も頭の山川安左衛門が陣頭指揮を執って、与力十人そして同心五十人を総動員して須田町から鎌倉河岸一帯を捜査していた。

吉五郎たちが、松田町に着いたそのとき、白壁町付近で火の手が上がったのを見た。

「白壁町へ走れ！」

よ組の連中は隣町の白壁町へ走った。

「吉助、あの長屋を火消口にしろ」

「へい、頭取、承知いたしました」

「三河町、鎌倉町の組頭、吉助に続け！」

「多町、紺屋町、鍛冶町、豎大工町の組頭たちは、それぞれ町内に戻って、住民を風上に避難させろ。急げ」
吉五郎は立て続けに組頭たちに命じた。

「はい、承知」

一斉に、お藤たち組頭は、自分の組を連れて、それぞれの町に散った。

お藤たちは豎大工町の人々たちを避難させ、須田町付近にいる吉五郎の元に戻ろうと、鍛冶町一丁目の路地に入ろうとした時、黒装束の一団が走り去っていくのを見た。

「純治、、一郎、太郎、田吾作。後をつけるよ。ついてきな。留吉、他の連中を頼むよ」

「お嬢さん、承知いたしやした。お気をつけて」

もうお藤たちは二間先に走っていた。

黒装束の一団は鎌倉河岸にある一軒の大店の壁に吸い込まれていった。

「皆、気を付けなよ。田吾作、自身番に行って、知らせてきな」

「はい、お嬢さん」

「あいつら、火付盗賊だな」

「皆、構えな」

「はい」

黒装束の一団は勝手口にまわり、刀を抜いた。

‘ドンドン、ドンドン’

「町火消した。火の手が迫っている。戸を開けろ！」

「開けちゃだめ！強盗だ。」

お藤は長鳶口を構えて怒鳴った。

黒装束たちは驚いて、声を放ったお藤に向き直った。

六尺もあろうと思われる黒装束の一人が、言った。

「こいつら、火消じゃねえか、早いとこ、片付けちめえ」

「おう！」その中の一人が、お藤に上段から斬りかかってきた。

それを左にかわし、お藤は長鳶口で敵の足を払った。

「ゲエツ」

前のりにつんのめった。

六尺男が、お藤に正眼の構えを取った時、

その時、

‘ピー’ ‘ピーー’ ‘ピー’

町奉行所の呼子の音が、赤く染まった江戸の夜空に響き渡った。

「おーい、引き上げるぞ」

大男がお藤にやられた男を斬って、逃げた。

「お藤殿、いかがした」

「辰之助様、盗賊がでたのです」

その後ろから、

「お藤、大丈夫か」

「佐々木様、大丈夫よ。あいつら、あっちえ行ったわ、追いかけて」

「おう、分かった」

佐々木たちは、黒装束の逃げた方向に走った。

残った同心と手下が、斬られた黒装束の男の覆面を取り去り、生きているかを確認していた。

「お嬢さん、大丈夫ですか」

佐々木たちを連れてきた田吾作が言った。

しばらくして、御用の高提灯を掲げて、火付盗賊改の者たち続々とやって来た。

急にお藤たちの周りが明るくなった。

「お嬢さん、なんだ。」

田吾作は目をまん丸くした。

その中の同心の一人がお藤たちのそばに来た。

「火付盗賊改だ。その方たち、ここで何をやっている」

それを聞いて、田吾作が震え上がった。

お藤は、黒装束の一件を奉行所の役人に話したと同じことを話した。

「今、町奉行所の連中が調べているあの男の一味だな」

「あい、あの盗賊は、お嬢さんが、倒したんだ」

純治が言った。

「そちたちは何者だ」

「よ組の豎大工町の組頭、お藤と申します」

「駒草屋の娘か」

「はい」

「あい、分かった」

「なに、もう町奉行所の連中が来たとな。お藤、奴らはどっちへ逃げた」

「あっちよ。あっちへだわ」

「お藤、かたじけない」

同心は、山川安左衛門に報告に走った。

【火付盗賊改：元禄十二年（一六九九）には盗賊改と火付改は廃止され、三奉行（寺社奉行、勘定奉行、町奉行）の管轄になるが、吉良屋敷討入事件があった元禄十五年に盗賊改が復活し、博打改が加わる。翌年、火付改が復活した。

享保三年（一七二八）には、盗賊改と火付改は、「火付盗賊改」に一本化されて先手頭の加役となった。博打改は火付盗賊改ができた年に、町奉行の下に移管されている。決められた役所は無く、先手組頭などの役宅を臨時の役所として利用した。任命された先手組の与力十騎、同心五十人、取り締まりに熟練した者が、火付盗賊改方頭が代わってもそのまま同職に残ることもあった。町奉行所と同じように目明しも使っていたようだ。。

火付盗賊改方は窃盗・強盗・放火などにおける捜査権こそ持つものの裁判権はほとんど認められておらず、敲き（たたき）刑以上の刑罰に問うべき容疑者の裁定に際しては老中の裁可を仰ぐ必要があった。火付盗賊改方は取り締まりは苛烈を極め、市井の人々からは恐れられ、ライバルの捜査機関たる町奉行所役人からは嫌われていた】

「町奉行所の奴らに先を越されるな」

山川は皆を叱咤した。

「おう！」

「御用「高提灯はあっという間に行ってしまった。雨が降り始めていた。

お藤たちは白壁町にいる吉五郎のところへ戻った。

「お藤、遅かったな」

お藤は盗賊の件について、手短かに話した。

「そうか、捕まるのは時間の問題だな」

火消口では、いつの間にか吉助だけでなく、ろ組そして、青山家の纏も振られていた。

「早くぶっ壊せ！」

吉助が怒鳴っている。

各組は負けじと長屋を壊している。

雨足が強くなってきた。

鎮火してきた。

「吉助、終わりだ」

吉五郎が怒鳴った。

吉助はすべての火消の連中がすべて降りるのを見てから、梯子から降りてきた。

「ご苦労」

「頭取、何とか、鎮火させることができました」

顔が煤で真っ黒になった顔から白い歯を吉助は見せた。

半鐘が鎮火を知らず三連打に変わり、暗くなった江戸の町々に響き渡った。

大名火消の青山家の陣取りしているところに、吉五郎はよ組の組頭たちを連れて挨拶に言った。

青山家の大名火消陣頭指揮者が兜頭巾を取った。

お藤は驚いた。

侍も、

「あっ、あの時の娘御か！」

「お藤、お前知っている人か」

お藤は三河への道中で、追剥から助けてもらったことを吉五郎に話した。

「これはどうも、娘がお世話になったとのこと、ありがとうございます」

「いや、いや。それがしは、丹波亀山藩、青山忠重の家臣太田道心と申す。娘御は火消しの組頭とな」

「駒草屋のお藤といいます」

しばらく話をしていたが、

「吉五郎さん、雨も激しくなってきたんで、皆を早く返そうではないか」

「へい、承知いたしました」

吉五郎は、太田道心たちと別れた。

そして、ろ組の頭取のところに行って挨拶をし、よ組の連中をまとめ、自身番に道具を戻しそれぞれの住まいに帰って行った。

「おくみ、帰ったぞ」

「あんた、ご苦労様。お藤も忙しかったわね」

おくみは吉五郎の革羽織を脱がした。

「今度の火事はひどかったようですね。一時、風上に逃げて私たちもちょっと前に戻って来たばかりなんですよ」

「死んだ人間も、焼け出された人間もきっと多いだろうよ。雨が降って来たんで、大変だ」

吉五郎はよ組印半纏を脱ぎながら言った。

明け六ツ。

神田一帯は霧雨に包まれていた。

お藤はいつも通り、おくみの朝餉の支度を手伝っていた。

「お藤、お前は疲れているから、もういいよ」

「おっかさん、大丈夫よ」

「昨日は、須田町まで焼けたんだって。この雨で、焼け出された人たちは、かわいそうね。家財道具も水浸しになっちゃうわ」

その時、玄関で声がした。

「吉五郎さんはいるかね」

「今頃、誰かしら。お藤出て」

おくみは汁をかき混ぜながら言った。

「はい、ただいま」

お藤は前掛けで手を拭きながら、玄関に出た。

「佐々木様、おはようございます。どうぞ、上がって下さい」

お藤は佐々木たちを客間に案内し、吉五郎に佐々木、町奉行の与力そして、普請役与力たちが来たことを伝えた。

おくみが三人に茶を差出して、部屋から出て行ったあと、吉五郎が入れ替わって入ってきた。

「これは皆様お揃いで朝早くからご苦労様です」

「棟梁、昨日の火事で焼け出された者たちのために、御救い小屋を今日中に造ってもらいたいのだが。大きさは、間口：十五間、奥行き：四間なんだが」

三人が頭を下げた。

「承知いたしました。何とかいたしましょう」

「かたじけない、よろしく頼む」

簡単に普請役が、御救い小屋を造る場所について説明し、佐々木たち三人は、慌ただしく駒草屋を後にした。

吉五郎は、玄関まで見送ってから居間に戻り、朝餉を取っているお藤と吉助に御救い小屋の話をした。

「早く食って、御救い小屋を造る段取りに入るぞ。吉助、鎌倉河岸に行って木材を手配してきてくれ」

「棟梁、承知しました」

「お藤、大工、鳶職人たちをできるだけ多く集めてくれ」

「あいよ」

「二人とも、三島町の道の向い、松田町一丁目の空き地に五ツまでに集合だ」

お藤は飯に汁をかけて、かき込んだ。

そして、二人とも弟子たちを連れ、駒草屋を飛び出て行った。

一刻ほどで、お藤は松田町の空き地に職人たちを連れてきた。

もう既に、吉五郎と何人かの組頭がきて、地面に杭を打っていた。

しばらくすると、吉助が先頭になって、鎌倉河岸の材木問屋の連中が木材を大八車に乗せて次々と運んできた。

吉五郎が職人たちにそれぞれの分担を的確に命じた。数人の職人は、杭の打っている場所を掘り下げ、基礎になる石を埋め込み始めた。

また、他の職人たちは、降ろされた木材に墨を入れる者、それを鋸で切り刻む者、そしてそれを組み立てる者たちが一斉に動き始めた。

柱梁が組み立てられたものから、鳶が建て起こし、骨組みを造って行った。そして、屋根職人が上に上がり屋根を葺いた。

屋近くになると小屋の予定地から少し離れたところに、大八車で多くの麦が運ばれてきた。そして、奉行所の同心たちが連れてきた芝居小屋の茶や女たちが、飯炊きの準備を始めた。

小屋は暮れ七ツに完成した。普請役の同心が小屋の入り口に葵の御紋の高提灯を掲げそして、‘類焼に付野宿の者御救小屋’と書かれた高札を立てた。

先日駒草屋を訪れた普請役の与力が吉五郎のところに来た。

「棟梁、ご苦労であった。礼を申す」

「何をおっしゃいます。勿体ないお言葉、ありがとうございます」

町奉行所与力の高津が、同心の佐々木を連れだってやって来た。

「棟梁、これで焼け出された者たちの手助けが出来よう。礼を申す」

高津と佐々木は頭を下げた。

「お藤、よくやったな」

「佐々木様、これからはよろしく頼みます」

「任せておけ。そう言えば、この間お藤が倒した盗賊の一人は雲霧仁左衛門の一味であることが分かった。名は六之助で、背中に石塔が二本刺青している掏摸あがりの盗人だ。前にお藤が見たという者は、洲走り熊五郎という名のようだよ」

「雲霧仁左衛門？」

「雲霧仁左衛門は、手下が数百人いる盗賊の頭で、ここ数年の間、江戸の付け火はほとんどが彼らの手の者のようだ。まだよくわからんが、幕府転覆を狙っているかとの噂もある。まったく、悪党どもが。これから、高津様と大奥の辰之助殿とわしとが奉行の命で、火付盗賊改の助勢に行くことになっておる」

「佐々木様、お気をつけて」

佐々木は吉五郎と話をしている高津のところに行き、それを機に二人は御救い小屋を後にした。

御救い小屋の前には、いつの間にか茶屋女たちが作った握り飯をもらおうと、住まいを失った者たちが行列を作って並んでいた。

「飯はたくさんあるから、ちゃんと並べ。横入りはだめだぞ」

町奉行所の同心が大声で怒鳴っていた。

それから三日後。雲霧仁左衛門たち四人は、火付盗賊改たちに追い詰められていた。

夜五ツ頃、四人は、今川橋を渡った本石町にある古い神官のいない神社の神殿に逃げ込んでいた。

「六之助の奴、仕留めたかと思っていたが」

「親分、ここに長居をしては俺たちも危ない」

「熊五郎、じたばたするな、みっともねえ」

ここには、仁左衛門以下、雲霧一家の小頭の洲走り熊五郎、江州生まれの木鼠吉五郎、羽州生まれのおさらば伝次、越後生まれで山猫を退治したところから山猫三次の四人が逃げ込んだのであった。

「俺がここで捕縛の役人を引き付けるから、その間におめえらは品川に逃げろ。そこから、京に行って、しばらくはじっとしている」

「それはだめだ、親分一人残して逃げるわけにはいけねえ」

山猫の三次が言った。

「分かった。ではみんなが逃げ切れるよう策を立てよう」

四半刻ほどで、仁左衛門は手下に策を与えた。

この間の話を、床下にいた辰之助は一部始終聞いていた。

大奥に仕える伊賀者、青葉辰之助が大奥に伊賀者の増援を頼んだことが功を奏したのか、雲霧たちの行動が、山川たちに手を取るようにならなっていた。

辰之助はすぐに社を離れ、同心の佐々木に雲霧仁左衛門たちが品川に立ち寄り、それから京へ逃げる算段だということを報告した。

その報告は、高津から山川安左衛門へと伝えられた。

「よし、田町源左衛門を呼べ」

付き人に命じた。

しばらくして、田町がやって来た。

「お頭、なにか」

「本石町の社に奴らが、まだ潜んでいるかもしれぬ。辰之助の案内で、手下を数人連れて行け」

「はい」

辰之助は、すぐに与力たちを社に案内したが、すでにそこには誰もいなかった。

それを確認した彼らは、すぐに品川に向かった。

品川の盗人宿に辰之助たちが着いた時には、山川たちはいろいろな姿に変えて、家を見張っていた。

「田町源左衛門、着きました」

「ご苦労であった。それでどうだった」

「やはり、だれもおりませんでした」

「お前たちはここに控えている」

「ははっ」

山川は伝令を呼んで命じた。

「よいか。雲霧たちがいるかどうか確かめるまでは、夜討ちはするな。俺の合図に従えと、者どもに伝えて来い。」

伝令は、与力たちに伝えに走った。

夜が明けた。立ちほだかっていた霧が、陽の光に散って行った。

人っ子一人宿に入る者はいなかった。時は長く長く、盗賊改めの連中には感じた。

暮れ七ツ頃から、盗人宿にいろいろな人間が入って行った。

「どうだ、それらしき者はいるか？」

山川は、佐々木と辰之助に振り向いて言った。

「お藤が見た奴が入って行きました」

佐々木が答えた。

「それがしが見た者は、雲霧仁左衛門をのぞいてすべてきました」

「しばらく様子を見よう」

暮れ六ツ、暗くなってきて人通りも無くなった。

「伝令、乗り込むぞ。なるべく生け捕りにせよと、皆に伝えよ」

伝令は皆に伝えまわった。

それを聞いた同心たちは、一斉に窓や戸口からなだれ込んで行った。

「御用だ、御用だ！」

あつという間の出来事で、中にいた盗賊たちは、ほとんど抵抗も出来ずにみな捕えられた。捕縛された四人の中には、雲霧仁左衛門はいなかった。

役人たちは、四人を後ろ手に縛りあげて山川の屋敷に連れて行った。この頃は、町奉行所は八丁堀に役所としてあったが、火付盗賊改めは公の役所は無く、個人の屋敷に牢等を設けていた。

それから、すぐに盗賊たち四人の拷問が始まった。

「お頭、雲霧の配下は、五百人ぐらいいるとはきました。盗人宿は府中内に十か所あると言っています」

田町源左衛門が報告した。

「そうか、もっと痛めつけ雲霧仁左衛門が行っているところをはかせろ。早くしないと逃げられるぞ」

山川安左衛門はいらだっていた。

「承知いたしました」

拷問部屋に戻って、同心に命じた。

「仁左衛門の行先をしゃべろ。石を一枚、乗せろ」

「ひゃー」

山猫の三次は気を失ってしまった。

「水をぶっかけろ」

「へい」

「今度は、熊五郎を連れて来い、逆さ吊りだ」

「へい」

熊五郎の髪はざんばら、体は肉が割れ、血が噴き出していた。

同心たちが滑車に縄をかけ、その縄で熊五郎の足を縛り、そして、同心たちは一方の縄を引っ張り、熊五郎を釣り上げた。

「鞭で叩け！」

田町源左衛門が叫んだ。熊五郎も四半刻で気を失った。

「次は、伝次だ。連れて来い」

連れて来られた伝次は熊五郎をの姿態を見て、

「いうから勘弁してくれ。頼む・・・」

と泣き叫んだ。

「よし、早く言え」

「頭は、恐らく板橋の盗人宿に寄って、それから中山道を通って京に入るつもりだ」

伝次は、板橋の盗人宿についてすべてを話した。

田町は、その話をすぐに、山川に話した。

「よし、皆を集めろ。板橋宿へ急ぐぞ。馬を曳け」

「はっ」

夜四ツ半すぎ(二十三時)、山川の屋敷は騒然とした。馬があちこちでいなないている。闇の帳を破るようにたくさんの提灯が揺れた。

山川安左衛門は、馬の手綱をひいて、

「よし、行くぞ」

「おう」

与力、そして同心たちが提灯を掲げて総勢三十名続いた。

板橋の盗人宿では、雲霧仁左衛門は木菟(みみずく)の長次と十人の手下が旅支度をしていた。

「長次、ここも危ないぞ、早く出発するぞ」

「へい、頭」

板橋宿は府内との別れの宿、人影も少なく出茶屋もあまりない。

山川たちは、とうとう盗人宿を見つけた。家からは灯りが全く漏れていない。

(すでに逃げおったか?)山川は、思いつつ下知した。

「あの家だ、踏み込め。」

しばらくして、田端源左衛門が、誰もいなかったことを報告に来た。

「逃げられたか、田町、次の宿はどこだ」

「蕨宿です」

「よし、行くぞ」

馬に乗っている与力たちと佐々木そして、辰之助は、山川に続いて馬に鞭打って、遅れまいと走った。

山川たちが、蕨宿の盗人宿を見つけたのは、暮七ツ半頃であった。

「佐々木と辰之助を呼んで来い」

山川は田端に命じた。

すぐにやって来た二人に、

「お前たち、家の中に雲霧仁左衛門たちがいるか探ってくれんか。我々はその合図ですぐに踏み込むから頼むぞ」

「承知しました」

佐々木は目で辰之助に合図を送った。

二人はほんの手短に打ち合わせて、盗人宿の入り口戸に向かい、山川の手先たちは戸の近辺の外壁に張り付いた。

深い夜の帳。鼻が啼いた。

一瞬、手先たちと佐々木は息をのんだ。

辰之助は、冷静に声色をまねて扉に向かって囁いた。。

「雲霧の親分、熊五郎です」

佐々木は鯉口を切った。

ほんのしばらくだったが、佐々木たちは長い時だった。

「ちょっと待て」

返事と同時に、戸が二寸ほど開いた。

その隙間に、辰之助と佐々木が手を突っ込み、戸を無理やり引き開け、それと同時に壁に張り付いていた役人たちが堰を切ったように家の中になだれ込んだ。

「御用だ！御用だ！」

「誰だお前たちは」

「火付盗賊改めだ、神妙にしろ」

「逃げろ」

中にいた数人の盗賊たちは刀を抜くのが精いっぱい、多勢に無勢、四半刻ほどで捕まったが、仁左衛門と

長次は裏山に逃げ込んでしまい、とうとう山川たちは、仁左衛門を捕縛することができなかった。

数日後、町奉行所において熊五郎たち仁左衛門の手下の取り調べが行われ、刑が確定し、市中引き回しの上、磔の極刑が、日を待たずに行われた。

沢藤南湘(ペンネーム)